

『とつぴんぱらりんのぷー』

(秋田県平鹿郡山内村の民話)

千葉大学日本文化研究会
民話分科会編

本書は、一九八〇年(昭和五五年)十一月一日に発行された手書き謄写版刷りの民俗調査報告書『とつぴんぱらりんのぷー』(秋田県平鹿郡山内村の民話)をリポジトリ公開用に活字化した覆刻版です。

本書を作成するにあたっては、明らかな誤字脱字等を修正したほか、漢字とひらがなの使い分け、および句読点の位置の変更等をおこなっています。

また、誤読しやすい部分には、ルビ・注釈などを付け加えたほか、地名・住居表示などは、調査当時のままで表記しています。

なお、現代では不適切な表現と思われる文章表現等については、当時の執筆者および話者からの採話を尊重して、そのままの言葉遣いで掲載してあります。

はじめに

今回私たちが民話をたずねて歩いた、秋田県平鹿郡山内村は、人口五千七百五十余名。郡の東南端に位置し、奥羽山系の山々に囲まれ、東は岩手県、西は横手市、南は増田町、東成瀬村、北は六郷町に接しています。

村内には急峻な山岳が多く、これらの山々に源を發する横手川、黒沢川、松川、武道川の河川に沿って集落が發達し、平坦な地域には水田が開け、山鹿および台地等には畑が点在しています。しかし、面積の大部分は山林や原野です。東西十五キロ、南北二十キロの山内村には、十二の行政区があります。

私たちが調査したのは、武道・平野沢・三又・南郷・筏・桧沢・大松川でした。七部落を五日間で延べ十二班（一班二名）で調査したにすぎないので、山内村の民話と言うにはまだまだ不十分ですが、その点はご了承ください。

承ください。

また、翻字をするにあたっては、なるべく語りのまに書きとめることに努力しましたが、方言の不勉強に加えて、テープの不備や録音の悪さなどにより、不明な箇所が少なくないことについては、深く反省しています。なお、話は昔話と伝説に分類して掲載しました。

おじいさんやおばあさんの楽しい語り、豊かな顔や手の表情、私たちは全身を耳にして夢中で聞きました。語りとしての民話が消えようとしている現在において、本物の語りで民話を聞くことができた私たちは、大変幸運だったと思います。でも、その反面、さびしく感じたのは、現在お孫さんなどに語っていらっしゃる方がおられなかったことでした。

私たちの訪問をきっかけに、お年寄りの胸の底に沈んでいた民話が再び息を始めることになれば、それはなによりです。でも、そういうことは、めったに

ないと思われず。民話が語られなくなった背景は複雑です。たった一度の訪問で変わる程、簡単なものではないと思われず。

語られなくなった民話。聞く人がいなくなったから語られなくなったのでしょうか。それともその逆なのでしょう。しかし、どちらであったとしても、両方の立場に立つことが可能な人であったら、「聞くこと」「語ること」について、もう一度考え直すべきではないかと思えます。

最後に調査にあたって私たちを温かく迎えてくださった山内村の皆さんにお礼を申し上げますとともに、この民話集「とつぴんばらりのぷー」（秋田県平鹿郡山内村の民話）をお贈りしたいと思えます。

一九八〇年十一月一日

もくじ

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・二

【昔話】

猿とキジの田作り〔話者の地区名〕(下松川)・・・・・・・・六
 うるひめつことあまんじやく(下松川)・・・・・・・・六
 三枚のお札①(下松川)・・・・・・・・八
 屁ひり女房①(下松川)・・・・・・・・一
 うりひめんこ①(上南郷)・・・・・・・・二
 猿むかし①(上南郷)・・・・・・・・四
 桃太郎①(上南郷)・・・・・・・・五
 笠地藏(上南郷)・・・・・・・・六
 猿むかし②(上南郷)・・・・・・・・七
 うりひめんこ②(上南郷)・・・・・・・・八
 つる女房(上南郷)・・・・・・・・九
 猿むかし③(武道)・・・・・・・・二〇

花咲かじいさん(武道)・・・・・・・・一
 桃太郎②(武道)・・・・・・・・二
 瓜しめ子(武道)・・・・・・・・三
 へっぴりじいさん①(上松川)・・・・・・・・四
 へっぴりじいさん②(下松川)・・・・・・・・六
 きき耳ずきん(下松川)・・・・・・・・八
 猿むかし④(下松川)・・・・・・・・九
 おむすびころり(下松川)・・・・・・・・一
 屁ひり女房②(南郷)・・・・・・・・二
 ねずみ浄土(南郷)・・・・・・・・四
 ながらの人柱(南郷)・・・・・・・・七
 三枚のお札②(南郷)・・・・・・・・九

【伝説】

狐の恩返し(筏)・・・・・・・・三
 番神様(筏)・・・・・・・・四
 黒沼の伝説①(筏)・・・・・・・・四

黒沼の伝説 ② (下松川)	四五
蘭婆王さんが力を授けた話 (下松川)	四六
田沢湖の伝説 ① (下松川)	四六
田沢湖の伝説 ② (南郷)	四七
三十人小屋 (南郷)	四八
からど石 (南郷)	四八
百物語 (三又)	四九
炭焼き小屋の話 (三又)	五〇
【山内村の民話 (話者と題名)】	五二
【民話分科会名簿】	五三
【編集後記】	五四

凡例

- (一) 本文の題名は、語り手または採話者が付けたものです。
- (二) それぞれの本文の前に、採話した地区名をしるしました。
- (三) 方言やなまりの表記については、できる限り発音に忠実を旨としました。

【昔話】

猿とキジの田作り

(※採話地区名)
(下松川)

猿とキジと話し合いして田作ったわけだな。田作って

まず、田堀ほりに行くってキジが猿をして出かけた。

「なんだか俺、（からだ）かんだ わかぬきつと行けね」

って言うって、猿が泣いたら、キジが一人でやったわけだな。今度田植えするっつえば、

「まだ俺は、かんだ悪い」

ってな。してまたキジは一人で行ってやるわけだ。何
回行ってもそだけだな。してこんだ最後に取りにくい
なったんじゃない。一番先に出て来てみんな取ってしまっ
たけど。キジ（ばかり）ばし。こった話があるけどな。

（瓜姫）
うるひめっことあまんじやく

(下松川)

ばっばよ、川さ行ったら、瓜流れて来たけどな。そ
れしまつといてして・・・いいわらしこ生まれて、う
るひめっことつけたんだ。

そして・・・機織りでくって「機織る」なんてこと
言うってんだと。ばっば買ってくってさ。あまんじやく
来て、

「あ（あそこ）この桃、もぎに行こう」

って言うってそして行ったんべー、わ（自分）しきたわくしてよ、
ハナつけたなんだし、

「落（落としてくれ）としてけっ」

って、言うってるところよ、うるひめっことよこしたば、

「きたね」ってか（食わね）ねかったんで、したら、

「お（おまえ）がくも上（食ってゆけ）がってけ」

ちちったけど、上がってこういなち止めていたんべ、
うるひめっことさ。

「いいか、いいか」

って。どんしてらしてよ、ばーんと離れたけどよ、けえなくなつてうるひめっこの。そして死んだばよ、そのうるひめっこの皮とつてしまつたけど、わーぺたつとかぶつたけど。そして家さ来てよ、ばんば来てみたばよ、機織つてらつたと。それで、

「うるひめっこ」

「オウ」

なんてけど。

「なんだ」

つちと。

「かぜひいてんだ」

つてけど。して、おつかねえようになつちまつたんべ、そのばば。して、今度ばばが山さ行つて芋掘つて来て、それ煮てよ、

「隣さもつて行けつてけ(あけて)でこい」

つちつたんばよ、わーみな食つちまつてんだけど。で、

入れ物かぶの中来て、でんと投げたけど。ばつばどこさ。

「こいんだんばー」

つて。(これだんば人でねえ)とつてよ、じんじき聞かせてよ、頭に血が流れつちつたんば(顔を洗えと言つたら)、ちらここんば(鼻の頭しか洗わない)だから、

「こら(顔全体)洗え」

つちたんばよ。皮みなとれたけど、それからばつばな、(怒つて)ごせいでよ、それさ縄つけでこんだ山中引つぱつて歩いたけど。だから茅の根つこにあまんじやくの血がついたんだつて、赤いところあるべ。茅、そしてなんだと。それつきしの話。

三枚のお札^{ふだ} ①

(下松川)

次郎と太郎と火たいてあたってたらば、山姥^{やまんば}来たけどな、どんどんどんと火たいてあつたらばよ、

「さ^(寒)びさびさび」

って、山姥来たけどな。

「にのなるかさなる、おかさだなー」

って言うけど、わらしたちのことよ。

「今夜一晩、俺と抱かれて寝ろ」

って言うけど。そんでおつかねくってせわねべな、そう言われたんばよ。そして何かでその人とろとろーつと寝れば、

「ズローン」

となめるけど、なつてらばよ。

「あいや、おつかねー。おつかねー」

つどつてな。

「ばんば、ばんば、しょんべん出る」

って言ったんばよ、

「てーっこさまけろ(しろ)」

ってけど・・・【録音テープ切れ】・・・

それから今度な、逃げでつたとな。便所の柱っこつないでよ。逃げでつたんべ。

「ま^(まだか)けたか小僧ー」

って、

「なんだべさー」

ってけど。札っこな、札っこよ。

「まけたか小僧ー」

ってば、

「まーんだべさー」

てけど、

「おやおやきのたべ」

って、びーんと引っぱったべ。ばっぱ寝でてな。便所の柱、

「デデデデッ」

ときたけど、ばっばのとこな。

「たーこの。ほいだー逃げだなー」

つてよ、^(追いかけて)ぼっかけてくるべ。

するど、

「あいやー、ここさ大つきい川出はってけろー」

つて、紙つこパツと置いたんばよ、サバサバと川出^では
つたけど、

「あっこさ行つたのは小僧だなー」

ぼーつて来てこんだな、

「ここさおつきい砂山出はってける」

つてまたそう言んだ。そこさモリモリモリど砂山出
くるけどな。その山ばば、

「あや^(深)ふけ。あや^(深)ふけふけ」

つて川越えてくるに。砂山出はったんべ、

こんだ。こりや上がれば落ちるべしよ、小僧どこまで
も逃げるけどな。あつて夜明け方にずっと山のお寺さ
着いたけど。それから、

「和尚様、和尚様。早く戸開けてける。山んばに食わ

れてしまう」

つてよ、言つたんば。

「はい」

つて。

「まず起きて顔洗つてがー」

つてけど。あつてよ、和尚様なそれがらまず餅あぶっ
てんだけど。そして一生懸命にせいことばーりで、

「あいやー。そこさ来た。早く助けてけろ」

つて言つてよ。したんば、こんだそれから戸開けたけ
どな。そして閉めて、かごさ^(入って)へつてずっと梁さ上げ
たけど。網でな。上げてやつて捕らえねえようにして。
して、

「和尚様。和尚様。小僧来ねけやー。小僧逃げて来

て・・・」

つて、ダンダンと戸叩くべ。

「小僧もへんぞも、来ない、来ない」

つてけど。したら、

「来たー。来たなんだ開ける」

つてけど。ほだんだ開けたけどよ。こう見るけどもな。

「あいやー、おつかね。かごしっぱられれば、落ちて

^(食む)か
れつちまうぞ」

つて、小僧おつかねくつてらんべ。したばよ、餅あぶ
れたけどな。そのばんば餅食いてかつたんべし。和尚

さんも餅食つでて、ばんば餅食^(食べたくて)いてたつて、きいても
言わねかつたんべしよ。

「和尚様。和尚様。そのそこさ高くした^(もの)だ、上げた
り下ろしたりしてける」

つてけども。ばんばよ。^(それで)で、

「ほー。それさか。あのかごさよー」

つてけど。小僧おつかねくつて、おつかねくつてらん
ばよ、

「高ずく、高ずく」

つて言えば、そのばんばおつきくなるけどな。そして、

こうかごさ手伸びてよ、伸びるけど、^(そうすれば)せは、

「低ずく、低ずく」

和尚様下ろしてしまふけどよ。何回もそやったんば、
^(短く)みつかくなつてよ、ばんばな。和尚さんが、

「^(先)さぎにさぐの栗コになつて、こう、炉のふち回つて
みせるか」

つてそう言うけど、そのおつきいばんばよ。それから、
コロコロコローつと転ぶけど、^(ちいさく)ちつこくなつてな、そ
のばんば。

そしてよ、和尚様の^(とこ)どこさ行けば、ひよこつとコロ
ンと行かねで見てるけどな。餅食つてらばよ。そのう
ちにおつしよ様、あっちの方ビリツとくだいてピタッ
とくつつけて、こうしてばんばどこ飲んでしまつたけ
どな、餅さつて。

屁へひり女房 ①

(下松川)

お山の方からな、嫁っこもらったけどな。嫁っこもらったんばよ、何だかだんだんに顔色蒼ざめて来るけど。それから、

「なしてんだー」

って、言ったんばよ。

「おならっこ出てるからよなー」

そゆうふうになつてんだけどよ。したら、

「なに、人の(がまんしてしまえ)こでてるまける」

って言ったけど、おばあさんが。しゅうとばば。そして
たんばよ、

「ふん(それなら)だらよー。炉のふちさだづまいてけろ」

って、ばばにな。

「それまでだにえー」

って、ばつば飛んでってしまったけどよ。夜さよ。

「こ(この)つたんだ嫁だんば、置かれね」

ってよ、おん出してやったな。

「いらね」

って言ったけど。

そしたんばよ、その嫁様家さ行くけどよ。行くしまよ、柿のあるとこさ行ってやったんべ。りんごだの梨だのある方さ、こう行つたんばよ。若わかえ人ら、男たちよ、それ梨落とへねえでいたけどよ。

「いや、ほ(そうしたのだったら)ーしたののら、おら屁へで落(落とせ)とへたど」

って、あつたけどな。したばよ、

「ほんだらなに、どつか落としてけろ」

ってつたけど。

「なん(いくら)ほでもかくから、げん(約束)こ」

って。

「んだらば落どすから、臼と杵を二、三本持つて来い」
ってけど。そう言ってそれさ腰かけてよ。まけたけどな。おならしたけどよ。

ほつたんばよ、その杵きねはぐるぐるぐるぐるつとまわ

って歩いてよ、梨みんな落としたけど。

そしてよ、その嫁さんのじんこ家行ってもらって行ったんべ。そしてその話、家さきけたけど。その出た家さ。ばっばどっさ(とつさ)。したばよ、

「あー(ああいう嫁だった)んだんば、もどさねばできね」
って、むこうもまたもどしたけどよ。そいでこなるな
んだんばもの。

それくつていの話。

とつぴんぱらりんのぷーって。

うりひめんこ①

(上南郷)

川さ、おっばさん洗だぐしに行つて、川さこいう
箱、流れできたけどよ。

「コツチャコイ コツチャコイ コツチャコイ」

って言ったんば、おっばさんのごさ流れできて、その箱拾つてきてみだんば(見たら)、うりへえつて(入って)だな。そのうりへえつたやづ、にるとごのすまっこさ、置いてあんば。

次の朝ま、赤ん坊のなぐおど(音・声)してよ、

「なんだべ」

どつて、行つてみたんば、うりが(の中から)赤ん坊が出はつてただと。

その赤ん坊、おっばさん育でだべた。

「誰とつけたらよかんべ」

ったんば。

「うりから生まれたから、うりひめんことつけろ」
って、言ったんだべ。それで、うりひめんことつけだ。
このうりひめんこ、おおがつておおがつて、おつきく
なつて。たんば、

「おれ、機織りしてみだいで、機つこたででくろ」
って。おっばさん機たでで、たんばな、ときおんどん

で、織つていただよ。たんば、そごさ、あまのじゃく
来て、

「戸あげでけれ」

つてゆう。

「あげれば、おっずさん、おっばさんにおごられるけ、
あげねえ」

つて。戸あげでけろつて、あげでけたんばがいつと戸
あげで入つて来て、こんだな、

「おれど行ごう」

つて言った。

「行がねえ」

つて。

「行ごうば行ごう」

つて言いはつて。

そんで、桃もぎに行ったんば、うりひめんこは下さお
いで、わんばり上さあがつてどうどと桃むいて、わん
ばつて食べてしまうけど。

「おれさもひとつける」

つて。

「ほれえ、めんくそはなんくそそれえ」

つて、投げで。たんば、

「まずくて、やんだせんでうめえのもいでける」

つたんば。

「おわむげえ」

つてけど。枝っこおわつと、手ぼつりもげでしまつ
たけど。そんで、死んでとうた。そしたんば、うりひ
めんこの面の皮ぐりぐりとはいで、うわつつらさかげ
だよ。おっずさん来たつが、うりひめんこになつて、
いでやつたどごさ、おっばさん来たつが、ばんば用が
あつて来たつが、

「いだが？」

つて。たんば、

「いだー」

つて。いがーい声で、いだつて。

「声が別だごど 別の入だか？」

つて言つたんば、

「そでねえ、かぜひいてんだ」

つて。声が別なつてやつけ、おつばさん首たさ縄こついで、茅刈つた跡よ、ずるずると、うりひめんこ引つ張つてつた。

猿むかし ①

(上南郷)

おつずさん、娘三人もつて。

あわの草取りしていたんば、猿がやつて来て、

「あんまり暑くて、できねえ。この草取つて、すけで(助けて)

くれだら、おらの娘三人のうち、一人ける(あげる)んどもなあ」

つて、話(はなし)したらば、猿がやつて来て、

「おれ、すけるけん おれさ ける」

つて言つた。

家さけたんば、だーれも猿さ嫁なんて行く人ねえ。いぢばんあどの娘コ、

「おれ、行くなあ おつずさん」

つてたんば。そつたんばな、まま食でゆっくり寝たけど。

次の朝ま、猿が嫁コもらいに來たけづ その猿が。嫁コになつていつて昔の三月の節句ていえば、姉コ(達は)たづあ餅(背負つて)しよつて、家さお里さ遊びに來たもんだもんな。お里さ遊びに行くつて、餅しよつて行くつたんば、その娘ずるしてよ。餅しよつてぐつたんば、

「おらいのおつずさん、うすさへ(入った)えつた餅、食でえ」つて言つてよ。だから、臼しよつて行つて。どっこいと、猿 臼おろして、

「おれ、行つて取つて來る」

つて、その臼おろすとごだけど、

「おろせば おれのおつずさん 土くせ(臭く)なつて、や

だ

って言うって。

「だら、しよって上がる」

って、上がったんべが。

「これ(これか)が？」

って言えば、

「ま(も)つと上の(も)が まだいいの(も)ある」

「これが？」

「ま(も)つと上の(も)が まだいいの(も)だ」

って、落ちるまで上げでよ。たんば、枝バリバリって

折れで、猿と臼と流れでいったもんだ。

さーるは流れだ(も)って悔しくねえけど、あとで姫が泣

いでやんべ(も)って、流れでいったど。

桃 太郎 ①

(上南郷)

お(お)つ(お)ず(お)さんとお(お)つ(お)ば(お)さんどいで、お(お)つ(お)ず(お)さん、山
さ木伐りに行った。お(お)つ(お)ば(お)さん、川(お)さ洗(お)だ(お)く(お)に行(お)つ(お)た
なあ。そしたら桃(お)が流(お)れ(お)で(お)きて、桃(お)ば お(お)つ(お)ば(お)さん川
が(お)ら拾(お)つ(お)て(お)きてで、

「ど(お)ご(お)さ(お)しま(お)つ(お)たら(お)い(お)が(お)ん(お)べ(お)な(お)あ お(お)つ(お)ず(お)さん」

って言(お)つ(お)た(お)ん(お)ば(お)、お(お)つ(お)ず(お)さん、

「も(お)み(お)が(お)ら か(お)げ(お)で(お)お(お)げ(お)ば(お)い(お)い(お)んだ」

って、も(お)み(お)が(お)らに(お)しい(お)だけ(お)つ。

ほ(お)した(お)ん(お)ば(お)、朝(お)ま(お)にな(お)つ(お)た(お)ん(お)ば(お)よ、男(お)の子(お)が桃(お)が(お)ざ(お)つ

くり割(お)れ(お)で(お)出(お)は(お)つ(お)てな、

「何(お)で(お)育(お)で(お)だ(お)ら(お)い(お)が(お)ん(お)べ(お)」

って言(お)つ(お)た(お)ん(お)ば(お)。粥(お)煮(お)で(お)よ、そのつ(お)ゆ(お)コ(お)か(お)せ(お)で(お)お(お)お(お)が

した(お)け(お)つ。……(聞(お)き取(お)れ(お)ず?)……う(お)ど(お)と、お(お)お(お)が

つ(お)て(お)よ。こん(お)だ、ご(お)は(お)ん食(お)べ(お)る(お)よ(お)う(お)にな(お)つ(お)た(お)け(お)た。……

(聴(お)き取(お)れ(お)ず?)……ご(お)は(お)んた(お)つ(お)て、ひ(お)とぐ(お)ち(お)つ(お)て

んばひとぐち、ふたぐちってんばふたぐちずつおおが
って、ずんずとおおがって ひとりめえになってとう
て。

おおがって言ったんば、こんだ鬼退治に行くって言
うべか。

「鬼退治に行くがら、日本一のきび団子つくってけ
ろ」

って。おっぱさん、きび団子つくって 腰をかごさ入れ
でよ、腰ささげでいったんば、猿だが雉だが犬だが。
そしたら、

「俺も行くがら 団子けろ」
って、もらったごどある。

鬼退治に行ったけづ。行ったんば、鬼は見えるった
って、川の向こうで なんじよう行がれねえって。桃太
郎は行って、そんで 太い木つなげたんば。それで
わだ(わたって)って行って鬼さ いたとごさ 行ったけどよ。った
ら、こんだな、猿はかっちやぐ 雉は頭を打って、犬は

かちづき、桃太郎は切って、鬼は負けで降参したべっ
た。宝物 車さつけで、それでな、えんやらや、えんや
らやって はごんだべ。

笠地藏

(上南郷)

夜(夜はいつも)ばよい(こしらえて)つつも、笠(こしらえて)こせえでよ。笠売りに行って、
町さ。一つも売れねえで 夜帰って来たれば、雪降って。
笠 六人の地藏さんいでな、それに一つづつかぶせて
家さ来て。おばあさん待ってる家さ来たって、なんに
も買ってねえがんべ。

「地藏さんに笠かぶせできた」
つつつただ。

地藏さん、こんだ、
「・・・夕べのおじいさん どこにいる」

「・・・夕べのおじいさん どころにいる」

米俵つけでなそこに、家さ来てよ。

あけでみだれ(開けてみたら)ば、米俵もっておいでつた。そのおじいさん、それでたいしいしたいい(・・・暮らし?・・・)したけづ。

猿むかし ②

(上南郷)

娘三人あつて、おじいさんいだどよ。畑さ、草とりに行ったばんばり、畑、草とれねえでよ。猿いでな。

「猿、俺娘三人もってだがら、一人く(あげる)れるがら、草とってすけろ」

つてば。

「はい」

つて、とってすけだけ。そして、とってすげだばよ、

家さ来たけど。おじいさん、ねだけどよ。

「おじいさん、おじいさん、ごはん食べろ」

つてば、

「俺、草とり猿にすけられでとって、誰が娘三人いるがら一人ける」

つて言つたど。

「おめ、行くが」

つてんば、やだすけど。二番目さ言つたら、二番目もやだすけど。三番目言つたら三番目、俺行くすけど。

いって こんだな、

「俺のおじいさん、餅好きだ」

つて、猿曰しよつたけど。そしたんば、川ばたさきれいな花コ、咲いでな。

「俺のおじいさん、花コ好きだ」

つて言つたど、その娘が。

「よ(よーし)おす、そんなら俺とつて来る」

つて、猿は言つたつけつてよ。猿はとつて来たんば、

臼しよって上がったけど。

「重いがら下ろしてげ」

てば、

「いいよ、俺元気だがらしよって上がる」

ってけど。しよって上がって、どこまで上がったてが。

「ずっと上にきれいな花コある」

ってば、

「ここが？」

ってば、

「もつと上だ」

つけどよ。

「これだが？」

ってば、

「もう少しある」

つけど。

「ここが？」

ってば、

「んだ、それだ」

それ、臼しよったまま落ちてしまったけど。

あどな、猿のほうの川さはだいで流して家さ持つて来たけづ。

うりひめんこ②

(上南郷)

おじいさんとおばあさんと、いでよー。

まず山さ行つただ、川さ行つただの。

うりこ流れで来てな。流れで来て、家さ来てとつて

あれしたらうりひめんこ生まれただでよ。

そしてこんだ、おいで機織りに行つたもんだっけな。

そしたんばあまのひやぐ来て、

「あまのひやぐ来るがら戸あげるな」

つたつて、俺、おじいさんとおばあさんだつて、この

くれえあげでいいが、もつとあげろってへえってな。

こんだうりひめんこ、あまのひやぐに連れでい
れでよー。で、こんだ、着物とりがえで、あまのひやぐ
は、うりひめんこの着物着て、機織ってらんだってよ。
それでよ、・・・(聴き取れず?)・・・

そしたんば、そごさうぐいす来てな、

「うりひめんこ 殺されだけ」
って。

「大つきい木き 逆立ち」

ってな。そって、坂に行ってみたら、うりひめんこ、

柿の木き繫つながれで殺されでだっけど。

とっぴんぱらりんのぷー。

つる女房

(上南郷)

おじいさん、鳥捕りに行ってつげな。弓持って、鳥
捕りに行ってよ。鳥捕りに行ったらな、鶴が足けがし
ていだってな。その鶴連れで来て、あ預がかっただって
よ。

そしたら、その鶴は(こんなじ)こんだ大つきくなって、機織つ
て恩返しするってな。一生懸命機織ってるんども、
あ(開けて)げで見えるなって、言ったんだってな。絶対あげで見
たらだめだって。

そしたら、とでも見だぐてあげで見だんだってよ。
そしたら、鶴が一生懸命羽根をとって、それで織って
たんだってな。こんだ見られてしまったがら、ここの
世にいらねえって、飛んで行った。

猿むかし ③

(武道)

じいさんとばあさまと畑さ行つてると、猿がもみさいたずらして、

「なんでいたずらする」

「おめえの娘さくれればいたずらしね」

けと、猿が。

「だら、くれっからよ。いたずらすんな」

て言ったつけ。

次の日、娘さ、

「猿さやだって」

けつとよ。

「行かねばいげね」

って。

「おめえいげ」

て、ばあさまやったと。

猿はよ、遊び来るとき、藤の花が大したついてける

つと。

「あれ、いい花咲いている。じじとばばさ持つていっ

たら何ぼ喜ぶべ」

って、娘が言ったけど。

「だら、取ってくる」

て上がったけつとな。

「これか」

「でなくもつと上の」

「これか」

「でなくもつと上の」

どこまでも猿さ上げたと。

「これか」

「もつと上」

「これか」

「だらばそれ」

それ取ろうと、ガラッといったら下さゴロゴロと落ちて死んだ。

それで娘は家さ戻ったけど。

「なんじゅうした」

ばあさまが喜んでな。

こういうわけで、花こ取ろうとして、だんだんいさ
んがられてよ。猿は、ぼったり落ちたと。ばあさまに
聞かせたと。

花咲かじいさん

(武道)

よいおじいさんと悪いおじいさんがいたと。よいお
じいさんというのは、滑稽なおじいさんであったと。

ある時期に、悪いおじいさんにその犬殺されてしま
ったときに、犬いきてその上に松植えた。その松はみ
るみるうちに大きくなって、その松切って臼作った。
臼作って、(それは)米が絶対になくならない臼。

そこさ、悪いじいさんとゆきあった。これはいかん
で、まさかりで臼みんな割って灰にした。いろいろな
枯れた木さ上がってよ、枯れ木に花を咲かせた。満開
の花が咲いた。

そのとき、ある殿様がお通りになって、おじいさん
はみるみる満開の花咲かせ、殿様に褒美をたくさん
もらった。

悪いおじいさんは、その灰をむりやり持ってって、
ある枯れ木さ上がって、殿様を待っていた。その殿様
がじいっとお通りになったので、灰を^(まいた)めえた。めえた
ところ、枯れ木さ花咲くどころか、殿様の目に入って、
目が見えなくなってしまった。

とっぴんぱらりのびー。

桃太郎 ②

(武道)

夜よ、赤ちゃんの声するぞって、瓜さうんだば、そこから赤っこが出て、そこから男の子が生まれたっけ。

「ばあ様さよー、鬼征伐してくるからきび団子作ってけれ」

けど。いぐ(行くな)なとも言えねえとて、きび団子作って、桃太郎はしょってただけど。一番先に犬来たっけと。

「桃太郎どこさ行く」

言ったば、

「鬼征伐に行く」

つてと。

「腰に下げたのなくんだ」

つたけと。

「日本一のきび団子」

「一つくれ」

「くれるからお供して行け」

そして、後ついて行ったんだ。そして、次に雉きしが来て、

「桃太郎、どこさ行く」

「鬼ヶ島」

雉さば、

「腰に下げたのなくんだ」

「日本一のきび団子」

「一つくれ」

「俺の後ついて行けばくれる」

て。そして、猿が来たっけどな。

「どこさ行く」

「鬼ヶ島」

「腰に下げたのなくんだ」

「日本一のきび団子」

「俺さ、一つくれ」

「お供して行けばくれる」

三人後ついて、鬼征伐した。

「雉が綱引くえんやらやあー、猿が後押すえんやら

やあー」

瓜しめ子

(武道)

胡瓜きゅうりから赤ちゃん生まれた。胡瓜から生まれた瓜しめ子。ばあさまとじいさまで育てて、だんだん大きくなって、大きくなったから瓜しめ子、機織りしたいて。

「じいさまとばあさまと町行ってくるからな。戸、絶対開けたっていけねえど」

「絶対開けんな、戸開けんな」

じいさまとばあさまと行った後さ、あまのじゃく来たど。

「瓜しめ子、戸開けてくれ」

「開けられね。じいちゃまとばあさまさ怒られるから開けらんね」

「ちよつと開けてくれ。指っこもぐるくれ開けてくれ」

「開けらんね」

「もう少し」

「こんくらい」

少し開けたつけど。

「もうちよこつと、もうちよこつて開けてくれ」

「怒られるからだめだ」

と言ったけど。

「もうちよこつと開けてくれ」

ちよこつと開けたつけど。そしたら、(あまのじゃくが)瓜しめ子の皮むいて、瓜しめ子の皮かぶっていた。

(おじいさんとおばあさんが)町から来たど。

「瓜しめ子いたか」

「ああ」

「なんと瓜しめ子、声を風邪（ひいたか）」
て。

「風邪ひいたあ」

カラスが騒ぐんだと。

ガア ガア

瓜しめ子のでんぐるまさ

あまのへくく つのくた つのくた

ガア、ガア

おかしいな。これはおかしいと思って。

「饅頭、これ隣の家さ持ってってけれ」

と十個さ入れて、瓜しめ子さ使ってやったと。隣の家
さ行っただけど、饅頭さわわ食って、馬のげす^(糞)入れてや
ったと。

「これ食べてけれ」

て。隣の父さんとか母さんとか、お礼言ってやった
と。ばあさんさ。

「馬のくそなんと食わんがん」

「瓜しめ子、なんとおめえ馬のげす持ってった」

瓜しめ子見て、そこ駆け抜けて、どンドン駆け抜
けてった。

へっぴりじいさん ①

（上松川）

ある所に、おじいさんとおばあさんがいた。その人
は正直なおじいさんであった。山さ木切りに行っ
た。山さ木切りに行っただけをだっきんとやった
に、ブーと屁をやった。

だっきんびー。だっきんびー。

とおならやった。まず知らねえ人現れて来てな、

「山々のへっぴりじいさん、屁ーたくの上手だな」
て言っただと。そしたらよ、

「ここさ来てたいてみれ」

て言ったけど。だば、

にしきさらさら　ごようの松原

とっぴんぱらりのびー

てよ。斧をだつきんとこっぴらましてびーとまけたべ
った。

「たいした上手だよ。あまり屁ーたれるの上手だか
ら、褒美あげる」

て言ったけど。

「重い籠かご欲しいか、軽い籠かご欲しいか」

てよ言ったな。正直なおじいさんだから、

「軽い籠かご欲しい」

て言ったけど。軽い籠をうちさ帰って来た。

「ばあさん、まず今日はこういう事があって屁ーた
れるの上手だから褒美あげるっていう人いたから、
軽い籠かご欲しいか重たい籠かご欲しいかって言うんで『軽い
籠かご欲しい』て言ってもらって来た」

て言って、軽い籠をうちさ来て開けたばよ、宝物いっぱ

い入ったひゃー。

そしたら、隣のおばあさんそれ聞いてよ、

「まずそういった宝物もらって来たから、おれのお
じいさんもよ、山さ木切りにやる」

て、欲の深いおばあさんやったけど。そしたば、おじ
いさん行って木切ったべった。また、突然に現れた人
いた。

「山々のへっぴりじいさん、屁ーまけるの上手だこ
とな」

てよ、また褒めたわけよ。そしたら、

「ここさ来てまけてみれー」

て言ったからよ。

にしきさらさら　ごようの松葉

とっぴんぱらりのびー

てよ、まけたしべった。

「あらー、上手だ。なんと褒美あげる」

て、その人さそう言ったからよ、欲の深いおじいさん

よ、

「重たい籠欲しいか、軽い籠欲しいか」

「重たい籠欲しい」

て言ったな。ほんに重たい籠もらったから、何ぼいっ
ペー入ってるかと思ってよ。喜んで・・・（聴き取れ
ず？）・・・

「こらこらおばあさん、こういう重たい籠もらって
きたよ」

てよ。開けたば 蛇からじゃーから、魔物いっぱいでて
きてよー、かじられてよー、大変に困ってしまったけ
と。だからよ、正直は一生の宝って言う。

へっぴりじいさん ②

（下松川）

あのよ、じっちゃんな、山さ木切りに行ったけつと

な。長者のお山さよ。木切ってたべー。たばよ、

「誰だ。俺の林に木切るもの」

て言うけとー。

「山々のへっぴりじいだ」

そう言つてよ。

「だら、ここさ来てまけてみるー」

て言つたけと、親方。

にしきさらさら ごよの松原

もっぴんばら とっぴんぼん

と、おならをまけたけつと。

「はやー、いいおならだこと。もうひとつ」

またひとつまけたけつと。

「お土産に何くれたらよかんべなー」

て言つてよ。

「軽い籠欲しいか、重たい籠欲しいか」

て聞いたんべつたら、

「俺、年寄りで持てねえから、軽い籠欲しい」

て言ったけど。たばよ、おばあさんに言ったけど。

「めでたなーよー」

てな。

「おけー籠重かった」

てよ。

「めでたなーえー」

てよ、はずんで来たっけと。来て開けてみたんばよー。宝物いっぱい入っている。銭っこからよ、じっちゃん
の着物から、ばっぱの着物からよ。お膳からお椀から、
米からよ。金がいっぱい入ってるけつと。それもらっ
て来て喜んだべ。

たら、隣のおばさんよ、

「あらー、（※原書の印刷不鮮明で読み取れず）〇ておれんとこ〇〇〇〇た〇き〇どこか
らこいつもらって来た」

て言ったけど。

「山さ行って、おれのじじいへーまけたんば、こいつ
もらって来た」

て言ったけど。

「だら、家へ行って、じじいのことやるー」

て。ばばの家さ行って、隣のじじいも山さ行ったけど。
して、何にそれはへたなおならでよ。申し訳ねえけど
な。親方よ、言わねえけどよ。でもよ、まけたもんだ
からよ、

「じじいよ、重たい籠欲しいか、軽い籠欲しいか」

て言ったけどよ、また親方。たばー、そのじじい欲た
かりでなー。

「おら、重てえな欲しい」

てよ。そしてよ、俺のじじいももらって来るべえと思
って、隣のばばあよ、着物みんなぼう焼いてよ、その
屋根っこさ上がって。けつぺた、ペタペタとはたいて
けつと。たばー、じじい、その籠もらって来てよ。何
ともいいもの入ってるーて、

「開けねえでげ」

て言ったばよ、山の中で開けてみたっけと、籠。し

たばよ、蜂から蛇からよ、おつかねえものまで入ってよ。蜂に刺されてつらな。まなこ見えなくなつて、

「ばばあー、ばばあー」

て泣いて来たつけどよ。はあ、俺のじじいも宝物もらつて来ると思つてばばあよ。何もいなでねえけつと。じじいのまなこ見えなくなつてきたつけど。

きき耳ずきん

(下松川)

ある鍛冶屋が、ふいごをしよつて行つたけど。だば、蛇いたつけど。ざつと道さいたつけど。

「何だそのさま、隠れてろ」

て言つたけど。その人は何ぼ言つたつて、蛇は逃げねえけど。ざつとしていたつけど。何だと思つたら、腹さよ出来物してよ、歩かねえからぐたつとなつてけと

道さ。枯れ芝取つてな、その鍛冶屋が火たいてよ、こ金っこやつけていぼなくしたと。たばよ、その蛇はいい物くれたつけど、宝物を。きじねの古ずきんという物くれたつけど。何でも聞けてよ、

「これかぶれ。カラスの騒ぐのみんなわかる」

てけど。ちよいと取つてかぶつてたばよ、カラス二羽いてな。

「ほどんたて。横手の娘は病気で、ほどんたて」

一羽のカラス。

「蛇とかわずと大黒柱の下にいてんだと。蛇はかわず飲むとてよ、かわずは飲まれたくねえとてよ。そのたたりが娘さいつてよ、娘は病気になつたんだ」

けど。カラスは二羽してよしゃべる。

「ほどんたて ほどんたて」

て言うんだと。訪ねて行つたけど、その人。そしたば、医者から何からいっばいいたつけど。札立ててるからよ、

〈その娘の病氣治せばよ、何十万もくれる〉

て札立ててたつけど。いいもんだと持って行ったけど。

「まず、蔵のねたおこせ」

て言ったべ。

「はー、何すんだべ」

て言うけど。その娘は苦しんでな。

「今死ぬべ、死ぬべ」

て言ってるのよ。

「まず、ここ押してみろ」

て板の間よおこしたつけど。たば、蛇とかわずといた

つけど。蛇はそこかわず食うと思ってるんだべ。か

わずは（食われ）かれたくねーと思つてよ。そしていたんだけど。

「それ取つてはなせばよ、いくなる」

て取つてはなしたつけど。たば、その娘の病氣はすか

すか軽くなつたけど。

猿むかし ④

(下松川)

とうさんがよ、娘三人もつていたけど。それがよ、

猿、水なくしちまつたけど。田ほひるべ。へーてしま

うからよ。猿が娘欲しくてな。

「娘三人もつてるから、どれでも好きなのくれるか

らよ、どうか水出してくれ」

けどよ。たばよ、家さ来て、親方よ、

「娘三人がた、あつちさ嫁になつていくか」

て言つたばよ、

「誰がそんなのさ、嫁になつて行くんだと」

て、おやじの寝ている枕でーと投げて、

「じいさん、じいさん、まんま食え」

て言つたばよ、

「俺、ねげ（願）えごとある。嫁になつて行がべねか」

て言つたばよ、

「誰がそんなのさ行くんだと」

と二番目のなんのもなつたばよ。田ん中荒れてしまふべ。稲が枯れるべ。三番目の来た。

「食らえ、じいさん。ふーさねえたって、俺が嫁になつて行くのもうわけ」
て言つたけど。

「たばいい」
と起きてまんま食つたけど。

三月の節句によ、餅ついてよ、家さ日けえりに来るんだな。その娘と猿と来るんだ。たばよ、

「ついた餅、臼のまんましょつてがねえばよいがね」
てけど、その娘は。

「おればよ、ただとつておけば、おいたのあの香りするから、臼のまんま持つてがねえば、俺のととかね」
て言つたべ。その猿は臼のまんま持つてしよつたべ。しよつてよ、川ばたへばいい藤の花さ咲いてるとな。

「あら、まずいいこと。おらのうちの人たち見たらば、何ぼいいつて言うべ」

て言つたばよ。

「だら、おれ取つてぐー」
猿臼を降ろすとこだな。けど、

「降ろせば、俺餅土くせえくてかねー」
て言つたけど。だら、しよつて上がったけどな。川ばたの藤の花とる。たば、ガリガリーて、ダボつて川さ落ちたべ猿。たば、流れて行くつてけど。

猿ばよ 命惜しくね

あとのおふみは泣くすんべー

て言うけど。

そして、わいのかまどたてた。けど、その娘は。その人よ、まず家さ遊びに来てな。姉達みんなよ、もぐらもちになつてよ、土さつっこぐつてしまつたけど。

おむすびころり

(下松川)

じじいだ人、山さ行ってよ、おにぎりしょってよ行って、木切ったけとなー。ダックンダックンと切ったばよー。まんま下げてる木も切って、コロコロ転がっちゃまったけとな、まんまよ。たば、

「あや、どこまで行ったべ」

と下りて行ったばよ、お地藏さんあるけとな。

「地藏様、地藏様、おれまんま転んで来ねっかー」

たばよ、

「来たっけ。ここさあげてらー」

て言うけど。お地藏さんがな、

「とんどねえから、おら」

「だら、ここさ上がれ。膝の上さ上がれ」

けど。

「とどかねえよ」

て言ったばよ、

「肩さあがれ」

けど。

「もってえねくて上がられね」

て言ったけど。

「いいから上がれ」

てけど。たば、しょうがねえから上がってよ、取ったけとまんま。取ってよ、土の着かねえとこ地藏様あげてよ、わは土の着いたとこ食ったけど。

「晚げな、ここさな、博打(はくちうち)する人が来るから、ここさよ、みかぶってよ、パタツと隠れてろ」

けど。地藏様がそう言ったから、

「博打(はくちうち)ぶちがいつぱい来るからよ、まだ夜明けてねえのに鳥つこの真似へー」

けど。夜中によ、みパタパタ動かしてよ、

「こけこのよー」

てけど。

「あら、一番鶏歌うから早く行こや」

て銭っこみんな置いてよー、家さ行ったけど。帰って
からよ、それみんな集めてよ、じじしよつて来たっけ
と。来てまた、隣のばば来たから、

「あやー、親方なことしてなったよ」
つて言つてな。

「おれのじじい、こう言つて行つたけ」
て、ばっば教えたんべ。

「たば、おらもじじいのことやる」
て言つてよ。その真似して行つてよ。まんまわざと転
ばしたっけと。

「地蔵様、地蔵様、まんま転んで来ね」
てやったば、

「来たっけ」
て言うけど。

「そこさ上げてたから取れ」
たばよ、地蔵様上がれつて言わねえど、頭まで上がつ
て取つたけど。たばよ、土の着いたところ地蔵様さあ

げてよ、われないところ食つたけど。また、

「博打ぶち来るから、鳥つこの真似せ」
けど。鳥つこの真似したべつたば、はだかれてよ、何
も取らねえで来たっけと。

屁ひり女房 ②

(南郷)

じんじもばんばも息子がいて嫁もらったけんどう
ーつて。

嫁ご見とると、だんだんとつら(顔)が、こう青ーくなる
けどーつて。

「何だおめえ、面だんだん青くなるよでないだか」
つて聞いたば、その嫁がひゃあ、

「あまり屁ーでるやつ、こてえーてらど屁こらえて
る」

つてな。そすたんば、

「なーんだ、屁だったらこらえなくっていいから、あま、まげれ」

つて。こんだ(今度は)、そのしゅうと姑さん言ったんばよ。

だばよ、昔は、ここいろり囲炉裏あつて、ここにしだがつて
いうのがあつたとなあ。大きいしだがな。んだなつて、
濡れた物みんな乾かすのその上で。掛けて。冬はいだ
ほれ、つまむとか 草履とかはくべ。長靴なんてなかつ
たから。そういうのみんな ここだこつなぐのよ。そう
すると、

「じんじがあつたら じんじがすんだの しゃつた

ごじていてけれ ばんばはあにくつて この雪の靴な
そこさ寒くていてけれ」

つて、こう言つたけど。

嫁ごが、たば その嫁がこんだ じんじとばんばと、
たごじといたば、嫁つこはブーツと大きいまあ屁さば。
ばんばは、まだあつちの方へブーツと飛んでいりやつ

た。んざあまつた。しんざあまつた。つてこうブーツ
と飛んである。たけどつて、そういう話いっつもする
のよ。おれのおじいさん。

それんだば、とてもだめだといふので、その嫁ご、
戻されてしまつたけどつてや。戻されるつていうんで、
そんで柿の木さ、あの大ーきい柿の木あつて、そこさ
人(いっばい)いっぺえたかつていたんだけど、何でだべと思つた
んば、その柿、なんぼおつたけど、大ーきい柿で落と
せねえんで、それでいたんだ。それで、そしてあんま
り大きい木だす。落とすつても落ちねえでいたつてい
う。こして(こつやつて)んだば、

「俺、落としてける」

つて、その嫁つこが、こんだはけつぐりつとそつち
や向けて、ブーツとやつたんば、その柿の木から柿み
んな落ちたつていう。そいで、んだば お山のおじいさ
んゆうのよいっつも。そしたんばなーんとそこのう
ちで、

「こりゃー、いがった」

とひゃあ。ほんで、昔はほんびっていったのよな。その賞与なんだ、今のもな。それいっぺえくれたけどって、その今の賞金だな、お礼のお金いっぺえくれたけどって。あー、これならばもったえなくてやれねえって、また家に戻したけどって。

いっつもその嫁の話するのよ、俺のおじいさん。

ねずみ浄土

(南郷)

じんじとばんばがいたけどー。たば、そのいいじんじと、隣のじんじはわりーじんじで、こっつのじんじはいいじんじで。

そして、庭掃いたば、豆っこころろーつと、豆っこ転んで来たけどな。で、その豆っこ拾ってこの庭さ

ここ土間がやっぱり大ーきい土間があつたの。庭仕事するので、それいっつもこう土間でやったから庭掃いてら豆っここればねずみの穴なんてあつたんだな。とっこのいねずみの穴、ねずみが土掘って。そこさころろーつと転がしてやったけど、またいっつも入ってねずみの穴さ豆さ転がしてやったらば、ひゃあそのねずみこんだば来てよ、

「じんじ、じんじ、いっつもあの豆っこもらってありがてえから、あのねずみの国さ連れていくから、俺と行こう」

って、こう言つたつけそうな。そすたば、じんじは、「なんじようして行くんだ。なんぼやつたって、俺行けねえ」

って、こう言つた。

「俺のおっぼさつかまれ、しっぼさつかまれ」
って。そして、豆さすくれっけど、たばまなぐつぶつてみたら、とーんともつと前ほらよう。たば、ドボー

ンと音がして、どこにかなんじようして行ったもんだ
かまずー、あかりー、^(明るい)まずーいいとこさ行ったけど。

そしたば、ねずみこ達みーんななんとそのおじい
さんがみんながもてなすんだけど。そして、こんだな
ねずみこたちみーんなしておひれさせるんだと。ふる
すき、昔は米をこしらえる深いがこういうふうな丸い
やつ、こう上の方が曲がつて重なったようなやつ、こ
れをひいてたんだな。ズーズーズーとひいてな。そ
れで、パラパラパラとこの糸を^(剥いた)むきただけど、おめみし
りのむけたけど、粉ほぜるもんで、やったけども。そ
れをひいてるけど、みんなで、ねずみこたち。

^(だれの)だーいん ^(声)こーいん
しーたれば

つて、こう歌ったけど、

なーにも ^(声)こーいも

おか^(痛)ねぐ^(ない)ねえー

ねえー^(ねこ)このこえ^(声)ばり

お^(痛)つか^(いい)ねえー

つて言うんだけど、そう歌つてよ、ひいてるけど、み
んなで。

みんなで、そこでいっぺえご馳走になって。そして、
こんだみんな喜んで

「たつくさんこんだな、^(ごちそう)ごつそうになつたす。家さ行
くべ」

つて言つたば、

「んだら、またおれ、尾っぽさつかまれ」

つて。そして、また連れて^(帰って)けえつてよ。おみやげも、

つづら、こづら、いっぺえさ宝物もらつてよ。そして、

ちやーん^(来た)と行ってくさそうな。そしたんば、隣のじん
じはつて、

「なんだー」

つて。

「今まで、俺と少し貧乏だったけや、なんでこんなお
えがた衆になつた」

って、そのじんじはゆ(言)ったけど。たば、

「俺、こういうふうなのを庭の豆っこみーんな拾ってねずみの火っこさいけんだけど」

そうゆったども、いいじんじがみーんな正直に聞かせたけど。そすたんば、隣のじんじは、

「はあー、んだんだんだ、俺もやるー」

なんてえ(家)さ行って、そのねずみの穴さ、豆転がしてやったけど。そしたんば、それもそのねずみも来てよ、

「俺の国さ行こう」

ってゆったけど。そしたんば、こんだそれを真似して、ま(目)な(つぶ)ぐ(つて)って行ったんば、それこそ行ったそうな。そしたば、宝物がいつぺえあるんだけど、その辺りに。そしてやつぱり、

ぎーいん こーいん しーたれば

なーにも こーいも おかねぐねー

ねーこの声ばり おつかあねえ

そう言ったそうな。っと、これがこんだな このじんじ

はゆすりたかりだってこの宝物は、いつぺえここにあるす、猫の声ばりおつかねえということは、猫の声やればこの宝物はみんな俺のになるって、こんだこ
ういうふうを考えてよ。そして、

「ニャオーン」

って言ったけそうな。

「こりゃー、猫が来た」

ってゆうので、ずっとそのねずみたち、いさんでよ。

ま(真)あ(暗)ーくらで、われ何がなんだかわからなくなっていたど。

「ヤーイ」

と鳴いたけどよ。したんば、なーんとそのじんじは、なんかおめはばまで俺のじんじも宝物もっこりもらって来るだべってゆうので、あーあいいいいさまだべなと思つてると、

「イエーイ」

って鳴き声がするそうな。なんだってや、またじんじ

はおかもってすて 何とする、なんじようとこなんだ
べってそのきりのすばこで、

「オーン」

って、その土の底で 鳴き声をするそう。なんじよう
もんだって、こんだこつち掘ってみたけど、たば じん
じだけ土の底さぐたってへえってて、

「エーン」

って、いたけどって。

そういう話するもんだっけか。土の底でワンワと泣
いて宝物だらいいんだけど、まるつきり泥だらけにな
って、ワンワと泣いていたけどって。

ながらの人柱

(南郷)

まずー、かければおつる(落ちる)、かければおつるって、何
度かけてもおつるもんだけどな。そいで、そのなん
だ村だか、かんだ村だけでも、その、まず頭(かしら)になっ
てる、そんだこで言え、区長さんとか、村長、町
長だっけかな。そういう人のあとがっひやあ、あの神
様に、聞き出すんだな、神様から。そすたば、あのあ
れだけど、

「そのは(橋)すは、必ず生(い)け(け)贅(え)、この生きてる人をその柱
の下にやあ、埋めねばなんぼかけたっておつる」

って、そう言われたそう。まず村長さんだ、ここ
で言えば村長さんが自分でこう聞いたば、自分でこん
だは言わねば、できねくなってしまったから、そう、
みんなが村の人が、だから伝えたわけよ。

そすたば、村の人が誰もやっぱり俺なるっていう人
がいねえがったな。自分で口を出したために、こんだ

自分が生け贄になって、その橋を守ろうとしたわけよな。そして、やっぱりそう言っつて、自分が口を出したために、自分がならなければなくなっつてしまつたから、自分の子供が、そのまづこゝで言えば、黒沢さ嫁になるんだけど、その子さひやあ、

「自分が口を出したために、自分が死なねばできねなくなつてしまつたから、おめは絶対口きくな」

つて、そういうふうなこと言つて、あの遺言みたいなこと言つてや。そして、自分が生け贄になつて、その橋の下に入つたんだつけど。で、それ、俺のおじいさんがいつつともそういう昔聞かせるのよ。俺にさ。

そして、その嫁が、まづ昔言えば殿様だけでも、ずつと山越えた、ちよつと山越えたあの谷さ行つたつけど、嫁になつてや。そしたば、あのいいー娘でいいー嫁だども、絶対しやべらないけど、口きかねえだ。そいで、なんぼしても口きかねえもんだからあきれてしまつてだな。

そのそつちの方で、嫁もらつたうちでや、あきれてしまつてだな。何言つてもあの、はなすしねえ^(はなし)けど。

それがあのやっぱりはなすしねえもんだから、とつてもできなくて、やっぱり返すてよこすなんだけど。そすたば、こゝう、まづこゝう行つて、山から越えて来

て、頂上、こゝう奥の方へこゝう行つたば。あのー、雉^{きじ}が雉な 山鳥な こつつの方で言えばな、山鳥がババーツとキヤーと鳴いて、バババーツと飛んでつてしまふ。

そしたんばそのとき、あの そこへついで来ている人がな、弓でな、パンとその雉を打つたんだけどな。その雉がいたつてゆうのでや。そうすたつて、そのときはじめつてその娘が、

「もの言わば」

つて歌つたつけど。その場でかごの中き入つて、こゝう送られて来るときには、

「もの言わば、雉はながらの人柱」
こゝう言つたつけどな。

「雉も鳴かずば うたれざらまし」

って。これ、子供の頃に聞いたんだっけどや。これだけは印象に残ってや。そいで、頭の中に入ってるのよ。ん、やっぱりな。親にそう言われたから、そういうとうさんのこと偲んでや、ゆったってことや。あの聞いたもんや。そんじ、それだけは俺憶えていてよ。

そすたんば、こんだその、あしってやとわかって、わかかって言わねんだなあって思って。そこでひゃあ、おとうさんはこういうふうに、人のために話をしたために、自分が亡くなってしまったす。人柱になってしまったっていうことを、こんだは言われてよ。んで、

もの言わば 雉はながらの人柱

雉も鳴かねば 打たれざらまし

って、こういうふうに言ったけどって、おれのおじいさん聞かせるのよだから、それだけ憶えてるのよ。

そんで、そこからその昔この人がひゃあ、これはやっぱり物言わねえ人でねえって。そっから、すぐまた

引き返して・・・(聴き取れず?)・・・されてよ。そして、よい嫁さんになって暮しているそうだって。そういうこと言ってよ、俺のおじいさん聞かせたもんでした。

三枚のお札^{ふだ} ②

(南郷)

昔はいたけどなー。村のわらし子が、

「ふるすき取りに行く」

って、こう言って山さ行ったけど。そしたら、そのかあさんがひゃあ、

「おまえ道さ迷って奥へ行くとだめだどー。もしも奥さ行ったら、あの紙こ札こ、三めえ^(枚)って聞いたけど、三めえって言って、そしてひゃあ、もうそうぐさ行くど、鬼婆^(おにんば)いるぞ」

ってさ。おにんばいるから、こういうやつで、その一つは大きな砂山になるのだす。一つは、大きい川になるのだから。それから、もう一つはなんだったつけ、なにになるのんだつけ。はあ忘れた。わかんねえけど、そいで、ふるすき取りに行つたば、やっぱりわからなくなつてしまつて。

そしたば、鬼婆、いいばんばだったけんども、迷つたけんどな。そいで、

「俺さ、泊まれ、泊まれ」

って、そのばんばがゆつたけど。それで、そこさ暗くなつてしまつて、泊まつたそうな。そしたば、

「まま食つて、寝れ寝れ」

って、そう言つたけさ。でまあ、隣でなんだかコソコソコソ音するから、ひよいと覗いて、あの穴から覗いてみれば、鬼婆、いっしょ懸命包丁研いでるんだつけど。そして、あの包丁研いでいたけどだつて、

「あー、こんだなあ、こいでつて、握つてくれるぞ」

って、そう言つて包丁研いでるんだつけど。はあ、俺帰らりやなんだつて思つて。なんだ、そうだ。一つはこれで、この紙で言えば、何回も寝てるからなつていうことを言つたつけ。あの何だつけ、その紙こ三めえがな、そう言つてくれたけんども。そんでもつて、こんだな、

「ばんば、ばんば、俺 便所さ行きてえ」

って、こう言つたつけそうな。だば、綱っこつけて、そしてこんだな、そのまけたらすぐにでも、こうゆつて、こう綱こさつけたけどな、そのばんばが。そすて、便所さ行つて、こんだひやあ

「出たか、こんぞう（小僧）」

こう言つたそうな。で、そのこんぞうが、

「まんだ、まんだ」

って。その紙がよ、綱こさつけてよ、そこさピタツて置いたけど、そつて何回も思つて、

「でたか、こんぞう」

って、

「まんだ、まんだ」

って。そのいっつも、

「まんだ、まんだ」

って。いっつもその、

「まんだ、まんだ」

その紙こが聞くと行っていつている間に、どんどん逃げたと。そして、こんだあの呼んでみれば、

「まんだ、まんだ」

って。

「でたかこんぞう」

「まんだ、まんだ」

って。あまりなげー(長い)のだから、そのばんばは行ってみたば、なんにも人いねえで、便所へその紙だけ、

「まんだ、まんだ」

って、言うなんだけどな。それから、こんだな、

「きつと、こんぞう逃げたな」

ってゆうて、こんだ、どーんどと追っていったけど。

そしたば、やつぱ向こうはちっちゃいこんぞう、こっちは鬼婆だから、そのまま向こうさ見えていった。うしろいたば、したば、あれだけんど、こんだばんば見えるもんだから、大変だなあと思ったつ。あの、

「大きい川になれー」

って向こうにいちめえ(一枚)、ポーンとこう投げたそうな。そしたば、だいらんそな川になったけどよ。その向こうよ、そのばんばが来たんだば。ポチャポチャポチャポチャ来んだ。歩いてだけどよ。こいでや、水ん中。そいで、どんどとまたはがつてまに、こんだ川越えて、やんべかつらげこいつだ。こんだそのさ、

「大きい砂山になれー」

って紙こ、ポイと投げて、だいらそな砂山にできたけどどな。そいでまた、どんーどと逃げてきて、まあ、それにして、こんだその、お寺のこんぞうだったでやんだ。そんで、お寺の和尚が紙こくれたんだっけどな。

「おしよさん、おしよさん、おしよさん」

つて、ダンダンまず戸を叩いて、

「まず、早く開けてくれ」

つて言ったつて。そのおしよさん、

「まんずー、ころもーくつてえから」

つて、こう言つて落ち着いているそうな。

「早くー、今、鬼婆来るさ、早くー、開けてける」

つて言つて、そう言つたば、

「まずー、しゃつつかぶつてから」

「まんずー、足袋履いてから」

つて、そう言つて、のんびりやつてんだつけど。その
こんぞさん泡食つて、そんで、よーやく開けてもらつ
たば、こんだなあ。そんまず、その鬼婆もすぐだがな、
こんだな、すんぐともすえの中さ、ひよいと隠しても
らつてや。そしたら、そのおしよさん、ちようど行つ
たさ、鬼婆へえつて来て、

「おしよ(お尚)、おしよ、こんぞさ着いたんべ」

こう言つたけどな。たば、

「こんぞうなんか、来ねえべや」

こう言つたけど、

「へえ、へえ、来たもんだ、ここに着いたのんだ、見
たのんだ」

「まんず、落ち着け。鬼婆、落ち着け」
て、

「まんず、俺と知恵比べしねえか」

つて、こう言つたそうな。たば、

「よす、いかんべ」

つて、このばんばがそう言つたけど、

「人間達には負けねえ、おつし(お尚)ようおまえなどに負
けねえ」

つて、こう言つたけどな。たば、

「んだら、何になれるだ。俺こ(お)ういうふうになれるだ。
ばんばなんて、なれねえだべや」

こう言つたども、

「何にもなれるだ」

なんて言つてき。

「んたら、まめっこになれるだか」

つて、こう言つたそうな。したば、ばんば、その鬼ば
んばが、

「(そんな)そんなもの、造作ねえや」

つて。たば、ころつとまめこさなつたが、そのまめつ
たけや、そのやつをよ、口さポーンと入れてよ。そし
て、その、あんぐつてやかえつて口の中さ入れて、カ
リカリカリつと食つちやつたけどさ。そのおしよさん。
そういうふうな昔語なんだばな、やつぱり。言うた
もんだつけどな。

それで、とつびんばらりんのぷー、なんて。

【伝説】

狐の恩返し

(いかだ筏)

数百メートル離れたところに、かなりの財産家があ
つたんですよ。伊藤与工門という人がいたんですよ。
あの人は上州から流れて、ここへ来たらしいんですよ。
しちさぞのおつうさんが寝ていると、白ひげのおじ
いさんが夢に出て来て、

「俺を助けてくれ」

ところが、その人はきつねだつたんですよ。助けてく
れと言われたときは、起きてたんですよ。そしたら消
えちやつて、疲れちまつて、また寝ちまつたんだつて
よ。そしたら、夢ん中出て来て、

「今助けを求めたのは俺だ。俺をどうかかくまつて

くれ。俺は獣だけれども他の獣に追われて逃げんだ」
安物のかやを買って、そこら辺の木を切って、囲ってくれたんだってよ。それをつまりあとで、明神様として祭っていたんだよ。そんで、俺が守ってやるっていうことで、瞬く間に財産家になったんだってよ。

番神様

(筏)

殿様がね、その、殿様が家老を連れて、その連れだつてこちらへ、その、兎とか狐、あるいは狸、そういう動物すらを狩人によつては、結局狩りに来たわけだ。

正月の頃、雪の上で、ところがあの、道路なんてこの辺になかったから、この迷つてさ。そのあれだよ、どうしようかと思つて、まあ迷つて、結局歩いていた

ときに、番神様つてご存知でしょ。そこに明かりがあったんだってよ、その明しで。

結局なんかかかんとか。かろうじて、こちらが筏の方だということがわかつて、降りて来たんだっていう、まあ伝説だ。

黒沼の伝説 ①

(筏)

炭焼きがいて、二人いて、仕事をしていたら小さな鮒が流れて来たんだってよ。そのうち一人が鮒を食べた。珍しいもんだから、鮒を捕って来た。ところで、珍しいもんだから、料理して今晚食べましょうってたんだってよ。ところが、一人が山へ行っている間に一人が食べちゃうんだってよ、こりやうまそうだったんで。それで食べたところが、喉乾いて水飲みたくなつ

た。それで、外でよ、こんだ水が飲みたくなって飲んだ。そうしたら、もう一人が帰って来たら、鮒がねえんで、食っちゃまったんだなって思ってたら、叫ぶんだってよ、沢から、

「俺を助けてくれ」

って。そんで行ってみたところが、角つのがはえてて、蛇になりかかってたんだってよ。そんで、その人が九郎てんだってよ。そいで、蛇になっちゃったんで、沼に入って、その人が九郎っていったんで、黒沼っていうんだってよ。

黒沼の伝説②

(下松川)

そこでな、炭焼きしたけど、三人だけど。黒沼のそばでよ。一人焼く人でいたばよ。そこさざ(雑魚)つこ来たけ

どな。ざつこ三匹来たけどな。その水ためさ。炭出すときよ、冷やしておくから、こう水たまりあつてあつたんべ。そこさざつこ来たけどな、三匹来てよ、その人捕つてあぶつたけど。焼いたんはうんめえ香りすんもんでよ。一匹食つたけど。一人つでよ、みんな三人分食つてしまつたけどよ、その人が。

したばよ、喉乾いてせ(しょうがな)わねえつぺどな。そしてよ、なんぼ飲んでも喉乾きな。そしてよ、見てらんば、こタツパタツパとなつてきたけどな。あんまり水飲んでそこのこの水たまりがよ、ちつこいこんだけどよ、おつきいなるてしまつた。あまりその人が水飲んだんで。あがつたつた人帰つて来たば、そこいらいっばい沼になって、それが黒沼の始まりだつて言うな。

蘭婆王^{らんばおう}さんが力を授けた話

(下松川)

力足りなくってよ、蘭婆王さんさ願かけたけどな。

「力あるようにしてくれ」

ってよ。して、何日も行つたば、なに、一ヶ月も行つてやったべかな。そういつたば、そのうちぐらいの晩方に、いいわけ^(若い)え奥さん来たけどよ。これって子供出したけど。

して、その子供な、タオル巻いて。そして、その子抱いて何時間もたつて、来ないんだその人。その子供あまり重くて、だんだん重くなつただけどな。石であるかわかんねえけどもよ。なんぼしたつて来ねけど。してたんば、今度何時間かまあ、来てやったわけだ。

したばよ、何ぞ^(くれ)けたんだ。てんで手拭いて、洗つてふいででけれつて。タオル一本よこしたわけだな。せば、そう使い方思わねかつたけど。もぎれで切れたけどな。ふんで、その神様せ、力授けてくれた。そう

力入れたと思わねたつて、力は言つてしまつて。

こんだ、相撲になつてつたわけよ、相撲に。勝負にあつたわけだ。なんぼやつたつて、勝つたつて言わねえわけだ、行司がよ。せば、

「これでもかつ」

つて、相手こう組んでよ、さうすにこう落としたけどよ。したば、相手は死んでしまつたけどよ。それでそのままとれねで終わっちゃ。それで今そこに・・・蔵のその梁よ。太い梁一人でかついで渡つたんだ。で、そのとき履いた足駄、宝にしてあるけどもよ。

田沢湖の伝説 ①

(下松川)

いっつもわけ^(若い)え十七、八の顔でいくつてよ。神様さ願かけたけどな。したばよ、あるときに友達二人三

人いてよ、水っこあるところで飲みたくて飲んだけど。

したばよ、なんぼ飲んでも飲みでけど。それもよ。したば、なんだかタツパタツパと水いっぺいになつたけどよ。そして、かあさん迎えに行つたけど、

「タツコー、タツコー」

って。したばよ、なに顔ばかりタツコでよ、蛇になつたって。それからそのアバよ、

「ありやー。ほんにこ見たくねえこと」
って。

まず、松明^{たいまつ} おかあさんが訪ねて行ってよ。友達来て行って行かねんだから。夜に、ばつ^{晩方}かたによ、迎えに行つたんべ。したばよ、タツコ出て来たけどよ。顔ぱりタツコであと下の方は人間でねかつたんだ。そしてよ、

「あやー、見たくもねえこと」

ってよ。アバな、だけで持っていた松明投げてやったけど。そしたば、ほれ、キノフリマスって、絵の黒いような魚になつたって。

田沢湖の伝説 ②

(上南郷)

たつ子姫はたいそう美しい娘で、いつもずっとこのままであいたと思っていた。

ある日、たつ子姫は湧き水の中に顔を入れて、水を飲んだ。すると、たつ子姫の顔がとても恐い顔になり、これでは家に帰れないと、そのままその水の中に入ってしまった。そして、そこは、大きな湖になった。

夜になつても戻らないたつ子姫を心配して、母親がキノヒリを持って探しに来た。変わり果てたたつ子の姿を見て驚いた母親は、持っていたキノヒリを湖の中へ投げた。それがキノヒリ鱒^{ます}という鱒になった。

三十人小屋

(南郷)

あの、ずっと昔の、このすぐの奥に、三十人小屋なんてあったもんだっけそうだ。やっぱ昔は化け物ているものやっただけ。

そしたんば、なかさはほつとにこの奥にさ、こういう大きい木ばりあったがな。そんなすもぐからや、今の学生さんなんて、見ねえと思うや。そしたんば、あの三十人小屋っていう小屋っていう小屋あったけどな。

すたば、そこでまず夜、みーんなんて化け物の話したもんだそうな。化け物、まずおっかねえようなはなす^(話)すた^(じ)んばよ。たば、ほーんとに口、耳まで裂けた化け物、あの入って来たもんだけどな。みーんな寝てからよ。

そして、三十人寝てられるうち、かた^(片)つ^(っ)ば^(端)じ⁽⁾から寝てる奴よ、なーぜたけど、こう観察してなあ。喉から

血吸うんだかなんだか、その化け物がよ、つ^(死なせて)ないでいっつちやっただと。こう、かた^(片)つ^(っ)ば^(端)じ⁽⁾から、一番から最後の人がおどかってよ。

そして、この化け物と思って、一番最後の人がその三十人いた奴、二十九人まで死なしてしまつて、でその三十人目がこの焚火の、このどんどと火焚いてよ。な、山小屋だからよ、火焚いてるから、その火でよ。その化け物さバズーッとその丸太かなんかで突いてよ。そして、どんどと逃げて、ただ一人助かった人いたと。

からど石

(南郷)

西川の方からど石っていう石があるんですよ、大きな石。その石は、そのそこさ神社を飾ったところ、

そのからど石が誰も知らねえうちに、その石がひとり
でにバーンと開けたので、開けたところが赤衣着物
がたくさん干してあったそうです。それで、そのから
ど石っていうのが、今戸にあるんです。

百物語（熊野神社の由来）

（三又）

岩井山からずっと奥へ入ると、椿川という所がある。
あそこに毎年炭焼きに若者が二、三人で小屋へ行つて
泊まり込みで炭焼きした。その小屋がぼつんぽつんと
二、三軒あって、そこに若い連中がある晩集まって、
「ひとつ酒飲みながら百物語しよう。百物語という
のは、誰でもいいからおまえの一番恐ろしかったこと
を語るんだ。おまえはどういうことが一番恐ろしかつ
たか。化けられたことあるか。あるいは魂を見たこと

あるか。そんな百物語しよう」

というんで百物語をしたんですって。それが、五、六
人か七人集まってそんな話して、百話をした。

百物語をするというとき昔からの言い伝えで、恐ろし
い化け物がその晩にやって来るんだという話で、

「そんなことはねえ」

若いやつらは、

「化け物が来たら殺して煮て食ってやろう」

というんで、元気はつらつに酒を飲み交わして、そん
なことひとつも心配しないでおったんですってな。

ところで、ある一人の人はどうも気持ち悪くて、晩
げ来るんじゃないか、晩げ来るんじゃないか、何か恐
ろしいことあるような感じを受けて、酒を飲んでから
夜遅くその山小屋で寝ていた。

みんなが鼻いびきして寝ているけれども、ある一人
だけが眠りにつけなくて心配していた。ところが、丑
三つ時に、何か前にドサラ、ドサラという音と、カサ

ラコサラという音がしたんですって。

別の人がその晩に確かに何かあったら、このなたで切りつけてやろうというんで、なたを研いで待ってあった。丑三つ時にそういう音がするんで、はて来たな、と思つて、眠つたふりして目を小さくして見ておつたら、妙な動物が来たんですって。何だかマントヒビでもなければ猿でもない、狐でもないような妙な動物が来たんですって。

その動物が寝ている人の所へ行つてくすぐり、

「えへへッ」

て笑うんですって。次の人のとこさ行つて同じことをやる。また次の人さやる。そして、順々にやって来て、自分さ所に来たとき、

「このちくししょう」

というんで、今まで隠しておいた斧ぶつつけたら、片足ぼろんと切つた。それでずっと向こうへ行つて、黒沢のまんだらある熊野神社へ男が逃げた。逃げたとき、

足一本とられてもんだから、三本足で追つて来た。大きな岩みたいなほら穴にその男がガラツと隠れた。穴の中でゴアツと引つ張つたものがあつた。それは大きな熊であつた。

その男は、その熊のために助けられたというので、そこに熊野神社を建てた。

炭焼き小屋の話

(三又)

炭焼き小屋が二、三軒あるんだが、毎晩七時ごろになるというと非常に上手な歌の音がする。それから太鼓、笛の音するわけだ。

「ちくししょう、また狐だろう」

どんなふうにしてああいう音させるんだろうと思つて、一人の男が夜こそつと出かけて、表見たら狐がや

っぱり、山の向こうの崖さプクプクと上がって見える。それからどうということすんもんだと思って見たら、狐が尾をひこひこと上げたり下げたりしていた。そういうことするんで美しい歌声が聞こえるものかなと思って、狐にかまわなかった。

しばらく聞いてから、コソツと、今やってんだな、と隠れて見た人には聞こえなかった。中にいる人は、「またやってら」と言った。

次の晩、隠れて狐台登って黙って見てるわけ。狐は相変わらず七時ごろ穴から出てきて、尾をまいたりする。あまりにもたまらないというので、何とかしようと思って自分で鉄砲持つてるわけでもないから、

「ああー」

と大きな声で叫びつけた。狐がびっくりして、そのまま向こうさ一生懸命さなっているもんだから、気をとられてゴロンとひっくり返って死んじゃった。

その狐を縄でしっかり結わえてきて、殺さないで持ってきて、家の中さ来て箱さ入れてみたら、化けもしなければ何もしない普通の狐であった。

【山内村の民話（話者と題名）】

（括弧内は話者の居住地区名で、昭和五五年

七月末現在のものです。）

○藤井円蔵（下松川）

「猿とキジの田作り」・・・・・・・・・・六

「黒沼の伝説②」・・・・・・・・・・四五

「蘭婆王さんが力を授けた話」・・・・・・・・四六

○藤井フジノ（下松川）

「うるひめっことあまんじやく」・・・・・・・・六

「三枚のお札①」・・・・・・・・・・八

「尻ひり女房①」・・・・・・・・・・一一

「田沢湖の伝説①」・・・・・・・・・・四六

○高橋ミナ（下松川）

「へっぴりじいさん②」・・・・・・・・・・二六

「きき耳ずきん」・・・・・・・・・・二八

「猿むかし④」・・・・・・・・・・二九

「おむすびころり」・・・・・・・・・・三一

○百合川長太郎（南郷）

「からど石」・・・・・・・・・・四八

○佐藤カネ（上南郷）

「うりひめんこ①」・・・・・・・・・・一二

「猿むかし①」・・・・・・・・・・一四

「桃太郎①」・・・・・・・・・・一五

○水谷エイ（上南郷）

「笠地藏」・・・・・・・・・・一六

「猿むかし②」・・・・・・・・・・一七

「うりひめんこ②」・・・・・・・・・・一八

「つる女房」・・・・・・・・・・一九

○泉サク（武道）

「桃太郎②」・・・・・・・・・・二二

「瓜しめ子」・・・・・・・・・・二三

○藤原清吉（武道）

「猿むかし③」・・・・・・・・・・二〇

「花咲かじいさん」	二一
○藤井キエ（上松川）	
「へっぴりじいさん①」	二四
「きき耳ずきん」	二八
○鴨田ハヤ（上南郷）	
「田沢湖の伝説②」	四七
○上村タカ（南郷）	
「屁ひり女房②」	三二
「ねずみ浄土」	三四
「ながらの人柱」	三七
「三枚のお札②」	三九
「三十人小屋」	四八
○照井三郎（筏）	
「狐の恩返し」	四三
「番神様」	四四
「黒沼の伝説①」	四四

○高橋藤一郎（三又）

「百物語（熊野神社の由来）」	四九
「炭焼き小屋の話」	五〇

【民話分科会名簿】

渡邊登志哉	（工学部 四年）
高橋恵美子	（教育学部 四年）
手塚 康子	（教育学部 三年）
濱野喜代江	（人文学部 三年）
徳沢 方子	（看護学部 三年）
遠藤 勉	（人文学部 一年）
ほか 一名	

【編集後記】

無事に民話集が出来上がりました。調査中に今回の調査は不調だという言葉もちらほら聞かれましたが、それでもこれだけの話を聞くことができ、民話集としてまとめることができたのは、大変嬉しいことです。現在のテレビや本による民話ブームは大変なものですが、民話本来の姿である「語り」というものがないようになってきている現実は否定することができません。この民話集はそういった語りをそのまま忠実に字にしたということで、意味のあるものであると思っております。

最後に、調査に協力してくださった山内村の皆さん、本当にありがとうございます。

『とっぴんぱらりのぷー』

(秋田県平鹿郡山内村の民話)

一九八〇年(昭和五五年)十一月一日発行

【発行者】千葉大学日本文化研究会 民話分科会

【発行所】千葉大学日本文化研究会

リポジトリ公開用覆刻版

『とっぴんぱらりのぷー』

(秋田県平鹿郡山内村の民話)

【覆刻版発行者】

千葉大学(旧)日本文化研究会民俗資料編纂室

代表 日本文化研究会初代会長 加部恒雄

【覆刻版発行日】二〇一九年九月一日

<https://doi.org/10.20776/106359>